

有坂博士追悼講演会について

一、はじめに

本稿は、昭和五十八年十一月十六日（水）、早稲田大学中国文学会において発表した「有坂秀世博士の学士院賞受賞前後」の草稿の後半部分に加筆したものである。前半部分も、当然、中国文学会の機関誌たる『中國文學研究』（第九期、昭和五十八年十二月）に掲載すべきであったが、成稿がおくれたため、前号にまにあわなかったことをおわびする。

その最大の理由は、有坂氏が学士院に提出した書類について、発表のときには私の推測をのべたにとどまったのであるが、その後で事実を確認する必要を感じたからである。私にとっては、むしろ、推測の過程にこそ重点があったといえるのであるが、しかし、推測を終ってみれば、その当否につい

て報告の義務も生じる。

学士院に所蔵されているはずの書類を調べることは、非常に困難なことであると私には思われた。しかし、幸いなことに日本学士院および同事務官鶴木亮一氏の好意によって書類を確認することができ、これまた幸いなことに、「有坂秀世博士の学士院賞受賞前後」の前半部分にこの報告を加えて、「有坂秀世博士の学士院賞受賞をめぐる」という題で、これを『國學院雜誌』第八十五卷第六号（昭和五十九年六月）に掲載される機会が与えられたのであった。

以上のような次第で、本稿をば「有坂秀世博士の学士院賞受賞をめぐる」(以下、拙稿「学士院賞」と簡稱する。)と併読されるよう希望する。⁽¹⁾

二、追悼講演会

故有坂博士追悼講演会は、昭和二十七年六月十五日に開かれたが、それに先立つ四月三日（火）に追悼会がおこなわれた。この会については、従来すこしも知られていない。昭和五十九年夏、母堂有坂敏子氏から四兄愛彦氏へあてた書簡が発見されて、会のあったことが明らかになった。

.....

さて去る三日には秀の追悼會へ非常な御多忙中を御出席下さいまして有難うございました。其御多忙の中をまたよけいな事を願ひまして御迷わくをかけますのはまことに本意でもございませんし、心苦しい事でございますが、追悼會の時のもやう一寸承りたくてたまりません。どうぞ此はがきへ其時のもやう極くかんたんによろしいのでございますから一筆お忘れ下さいませば、此上なく有難く嬉しく思ひます。

はがきがお手ぢかにあつた方がお返事も書きやすい事と思ひまして、住所を書きまして入れ置きました。まづは右御願ひまで

四月六日

とあって、返信先だけでなく、返信人（²）愛彦氏）の住所氏名まで書き入れたハガキが同封されている。

愛彦氏は、昭和二十六年九月、音楽部長として日本文化放送の創設に参画し、昭和二十七年四月一日の開局のころは、局に寝泊りするほど多忙であった。追悼会にはお膳立てがととのったところへ、有坂家からただ一人招かれて出席した。会に出席したとしか記憶にない。

おそらく金田一京助氏を中心とし、言語学、国語学関係のごく近い関係にあった人たちの集まりであったと思われる。しかし、まだ今日詳細を明らかにするには至っていない。

追悼講演会のことは、すでに拙稿「学士院賞」でふれた。「有坂秀世博士著作論文年表」（『国語学』第十輯所収、昭和二十七年九月）が少なくとも追悼講演会以後に作られたことを指摘したのである。

さて、追悼講演会の内容を『言語研究』第二十二・二十三号（昭和二十八年三月）の「彙報」によって左に示す。

6月15日（日）故有坂博士追悼講演會 午後1時半 於東大法文經29番教室（國語學會・日本音聲學會と共同主催）

開會の辭

時枝 誠記氏

講演

1. 「有坂博士の思い出」

金田一京助氏

2. 「奈良時代のヌとノの萬葉假名について」

大野 晉氏

3. 「有坂博士と重紐論」

河野 六郎氏

4. 「有坂秀世博士と音聲學研究」

大西 雅雄氏

閉會の辭

宮良 當壯氏

故有坂博士の母堂・御家族も出席され、非常な盛會

であった。(p.一二四)

『國語學』第十輯の「彙報」(p.一〇五)も、ほぼ同内容であるが、この会を東京における第二十五回の公開講演会としている点にやや違いがある。

ところが、『音聲學會會報』第79号(昭和二十七年七月)の「會務報告」(p.三二)にみえる「有坂秀世博士追悼講演會」の報告は、前二者に比して簡略である。そのことは、『音聲學會會報』第78号(昭和二十六年十二月)の「會員名簿」(pp.二七—二八)に有坂氏の名がみえないこととも関係があるのではなからうか。右の講演会における大西雅雄氏のプリント「日本音聲學會における有坂秀世博士の記録」によれば、昭和二十六年十二月に音聲學會を退会したことになる

が、「會員名簿」(『會報』第78号所載)末にみえる註に「會費を二ヶ年以上引続いて未納の方は、この名簿から削除してあります。三年目からは會員原簿からも省きます。」とあることから考えて、自発的な退会よりは、むしろ、削除されて會員でなくなったという可能性があるように思う。この時期、自発的に退会の手続きをするゆとりはなかったであろう。昭和二十六年十二月、学士院賞の授賞候補となっていることを知らせた師金田一京助氏への返書も、代筆の短文だったのである。⁽⁵⁾

すでに會員ではなかったからなのであろうか、『音聲學會會報』は計報を載せなかった。一方、『言語研究』第二十一号(昭和二十七年三月)は、「會員の異動」の後に、

○ながらく病氣療養中の會員有坂秀世博士は先般その「國語音韻史の研究」(昭和19年)に対して学士院賞を授けられることに決定したが去る3月13日遂に逝去された。

(p.六七)

と計報を載せた。ここでは「會員」となっている。⁽⁶⁾『國語學』第九輯(昭和二十七年五月)の「彙報」では、

○日本学士院賞受賞

本学会前評議員有坂秀世博士は、その著書「國語音韻

史の研究」により、去る昭和二十七年三月日本学士院賞を受けられた。」(p.一二六)

という記事のほか、

○前評議員有坂秀世博士逝去

本學會前評議員有坂秀世博士は長い間御療養中で居られました。去る三月十三日、薬石効なく遂に逝去されました。生前国語学、言語学に寄与せられた多大の御功績と本學會に寄せられた御助力とを偲び、ここに深い弔意を捧げます。

(p.一二六)と黒枠で囲んだ訃報を載せた。国語学会結成の昭和十九年当時はどうであったかわからないが、『國語學』が創刊された昭和二十三年に有坂氏は評議員であった。(cf. 『國語學』第一輯 p.一五八。昭和二十三年十月。)昭和二十五年七月八日現在の「國語學會々員住所録(假)」(『國語學』第四輯所収、昭和二十五年十月)には有坂氏の名がみえる(p.一二三)から、このときは会員であった。『國語學』第七輯(昭和二十六年九月)の段階では、もはや評議員中に名を列ねていない(裏表紙、表3)から、会員でなくなっていたのではなからうか。逝去時にたとい会員でなくとも、その功績に敬

意を表して、会員待遇あるいはそれ以上の礼をとったのだと考えられる。大学入学の年、昭和三年に入会して以来の音声学協会との深いつながりを考えるとき、『音聲學會會報』にも会員待遇の訃報があってもよかつたのではないだろうか。

追悼講演会に、有坂家からは母堂をはじめ、次兄光威氏二女愛子氏、四兄愛彦氏夫人富子氏の三名が出席した。愛彦氏は、直前の六月十一日、順天堂大学病院に入院して、この会には出席できなかった。

追悼講演会の後、金田一京助氏にあてた六月二十二日付の母堂の書簡が残っている。

先日は秀世の追悼御講演會御催し下され御多忙の中を御出席下さいまして、至らぬ秀世の身に餘ります御ていねいな御言葉をいたゞきましてありがたく、早速にも厚く御礼申上ぐべきの慶親戚の老人の泊り客御座いますためまご／＼いたし一日一日と延引いたしをりました慶、今日ほまことに／＼御鄭重な御手紙をいたゞきまして恐れいりまして御座います、埋れ木となりまして朽ちはてるべき秀世をかくまで御慈愛御引立下さいます御高恩身にしみまして有難く嬉しく私の終生忘れ得ませぬ事でございます、……(以下略)……

これは儀礼的な礼状ではない。真情をのべたものと解すべきである。

三、その後

これで一切が終わったわけではない。鈴木療養所で息子が生命がけで書き、母も必死で助力した原稿が出版されずに残されていた。この原稿のことは、金田一京助「有坂秀世博士遺著目録」(『国語研究』創刊号、国学院大学国語研究会、昭和二十七年十二月。)や『上代音韻攷』(三省堂、昭和三十年七月)の序文「序にかえて」、『語勢沿革研究』(三省堂、昭和三十九年十一月)の「序」など、金田一氏の書いたものによってよく知られている。特に『語勢沿革研究』の「序」が発見の経緯について最も具体的である。ここでは、母堂の書簡をたどるところによって、それをもうすこしはっきりさせてみる。

いよ／＼お暑くなつてまゐりました折からお元氣にお過しの御ことお喜び申上ます、先日は御手紙を恐れいりました、まことに御親切に仰せ下さいますして御礼の申上すやうもご座いませぬ、漸く待ちにまちましたお天氣もつとさままして書物もよく／＼日に干し終りましたので氣にす、秀世が御承知の通りの病氣でご座いましたので氣に

かゝり御迷わくをかけましては申わけないことゝ存じまして充分に日にあてましてございます

先生に御慶理願へますとは秀世の限りなき仕合せでございます、なお先頃ノートと仰せ下さいましたが、学生の頃諸先生より伺ひました御講義を心覚えに書き置きしましたものらしきノートとげらざりげんこう杯物置から一つとみ出ましてございます、御送りいたしました本は茶箱三行李二でございます、御場所をふさげまして誠に申わけがございません、いつも御迷わくのみおかけいたします事ふかく／＼御わび申し上げます

これは明後廿九日(火)午後に御宅へ御届け致します時間は運送店のものはつきり申しませぬので一寸申上かねます、何分よろしく願ひ上げます。

今頃春彦様の御放送を伺ひました、御元氣に御活躍の御事限りなく御喜び申し上げます、御暑さ日に増します折からどうぞ皆々様御からだ御大切に遊しますやう念じます、末ながら御奥様へよろしくねがひ上げます

七月廿七日

有坂とし子

金田一先生

光威夫妻よりもよろしく申上ますやうに申出でましてござ

います

運送店のつごうで、荷物は昭和二十七年七月二十九日午前にとどけられた。これに対して、金田一氏より返事があったと思われる。さらにその返事にいう。

いつもく御慈愛深き御たより有り難く、くり返しくり返し拝見いたしました、此きびしき御暑さにも御障りなく御旅行遊し一昨々日御無事御帰京になりました御事限りなく御喜び申し上げます、御奥様にも御機嫌よくいらせられますか 餘りおあつうご座いますのでお案じ申し上げます

さて御帰京早々御つかれの中、ことにお暑い折から早速春彦様と御一所にあの本を御覧下さいまして 秀世の苦心を深く御同情御察し下さいましたことまことに有難く嬉しく恐入りましたご座います、又ノート原稿などは此まゝに置きましては反古紙となつてしまひますことゝ存じまして夢中で本と一緒にさし出しましてございませうが、もしや秀世がまちがつて書きました處など多くございまして 先生よりおしかりをいただきますやうな物ではございませんかと存じまして日々それのみ案じてをりました處、昨日の御手紙にて御なさげ深きおことばをい

たゞきまして私はほつと安心いたし 涙ながらにあの有難き御たよりを秀の靈に供へ神様佛様に深くく感謝のことばを捧げました

先生からいたゞきます重なる御高恩にたいしましてはらぬ筆には御礼申し上げますすべもございませぬ どうぞ御察しいたゞき度願ひ上ます、曆には七日立秋と見え居りますが残暑厳しき事と存じます 皆々様何卒おからだ御大切に御あつさ御いとひ遊しますやうねんじ上げます

末ながら御奥様へも春彦様へもよろしくく願上ます、まづは御礼申しのべたく

かしこ

八月九日

有坂とし子

金田一先生

有坂氏愛用の書籍を金田一京助氏に寄託しようとする母堂が考えたのは、以前、苦い経験があったからである。このときのこととは、金田一京助「有坂博士の想い出」『國語學』第十輯、昭和二十七年九月）や金田一春彦「有坂博士の想い出」『日本語言韻の研究』所収。東京堂、昭和四十二年三月。）に記されているが、「春以来有坂さんの蔵書が市場に出る」(「有坂博士の想い

出「p八六」という噂が起因となつて、募金活動がおこなわれた。⁽¹¹⁾母堂は蔵書の散佚を恐れたのであろう。ところで、七月廿七日付書簡に「先頃ノートと仰せ下さいましたが」とあるところをみると、ノートは、金田一京助氏が所望したものであったことになる。ところが、八月九日付書簡によれば、少なくとも原稿は、母堂の意思で荷の中に含められたと考えられる。

以後は、かくして世に出た原稿をめぐつて問題が展開する。

よい時候になりましたとございます いよ／＼御機嫌よくいらせられます御事何よりの御ことと御喜び申上ます、さて先日は御遠方の慶をわざ／＼御いりいたゞきまして恐入りました いろ／＼御心配下さいました秀世の原稿の不足一枚は、あの原稿を日に干しました節 日記類も一所に干しましてご座いますので、もしや日記の包の方にまぎれこんではをりませんかと存じましてよく／＼しらべましてございますが、それらしき物も見当りませんでございませす まことに申わけなく存じます 早速にこのこと申上たく心のみあせつて居りましたけれども 三日より俄にからだの工合あしくこゝろにまかせませんで

のび／＼になりました事を御わび申し上げます、もはや明日は床をはなれたく思つてをります あの前稿をいちち御整理下さいました事さぞ／＼御つかれ遊しました事とあつきあつき御なさを勿体なく有難く御礼申上ます 春彦様にも一方ならぬ御厚情をいたゞきました事と有難く御礼申上ます どうぞよろしく御傳聲いたゞき度願ひ上ます 原稿、本などはからず先生の御目を御通しいたゞきます事になりました事 私の最後の喜びこれに過ぎますことはご座いませんに 其上御整理下さいましたとは御礼筆にもことばにもつくされませぬこととでございます 何か御好きな物にてもと／＼のへ御礼やら御機嫌伺やらに参上申上べきの慶をまるであべこべの事になりまして 大へんな頂戴物をいたしました如何いたしてよろしきやと思ひくらしをります 又秀世の墓へも御まゐりいたゞきましたよし、地下にて秀世も限りなき御高恩に涙にむせびをることと存じます、去る三日心光寺住職⁽¹²⁾より手紙にて 金田一先生 秀世のはかに御まゐり下され御町重なる御布施を頂きました 因て翌日証大菩提の卒塔婆造立の上香華灯明を捧げ懇に御回向申上ました、と申し参りました まことに何から何まで御手厚き御な

さげに預りまして御礼の言葉も覚えませず 私心からの感謝の念どうぞ御察し下さいませ

十月九日

有坂とし子

金田一先生

『上代音韻攷』の原稿は、第二部の冒頭二枚が欠けている。『上代音韻攷』p.171の「刊行委員附記」を参照。そのことはさておき、この書簡で知られる重要なことは、このとき有坂氏の日記が残されていたということである。わずかに残された断片のかずかずから、まわり道をしながら、有坂氏の残影を追いかけている私にとっては、この日記の価値は想像を絶する。三十年の歳月の壁はあまりに大きい。プライベートの問題はあるにせよ、学史上に益するところもまた大であって、当時適切なる措置がとられていたらと悔まれてならない。

篋底深く蔵されていた原稿の価値を、思いを分けあった母堂は信じていた。原稿が書かれて後、十年ほどの間に、日進月歩の飛躍をみせた息子が、この原稿の出版をもちや望んでいないことは知っていたであろうが、彼女は出版を承諾した。

金田一京助、春彦氏父子、鈴木眞喜男氏の尽力によって、

やっと昭和三十年七月、この遺稿は『上代音韻攷』と名づけて刊行された。そのとき、金田一京助名でつぎのような通知状⁽¹⁴⁾が出された。

拝啓

盛夏のおりから、ますます御機嫌よろしくお過しの御様子、なによりのこととお喜び申しあげます。

さて、御存知のとおり、有坂秀世博士は、さる昭和二十七年三月になくなられましたが、これは惜みてもなおあまりあることとございました。その後、ほどなく、故博士の母堂から、のこってあった御蔵書を形見にと、お送りいただきました中に、ずっしりと重い一包みの遺稿がございました。この遺稿は、昭和九年ごろ、病床でものされたもので、故橋本進吉博士の推薦によって言語誌叢刊第三期のひとつに予定されていたものであったことがわかりました。全篇三千枚余、第一部「古代日本語に於ける音節結合の法則」第二部「音韻変化について」第三部「奈良朝時代に於ける国語の音韻組織について」の三部から成り、故博士の学問の全体系をうかがうにたる貴重なもので、とうてい、このまゝにしておけませんゆえ、母堂のお許しを得て、出版させていただくことにい

たしました。以来、計画をすゝめまして三年、いよく来る七月二十五日、三省堂より『上代音韻攷』と題して出版される運びになりましたことは、御同慶にたえないところでございます。

ところで、本書は、文部省から研究成果刊行費の補助をうけましたので、規定により、初版は、印税なしということになっておりましたが、さいわいに、本書の出版に對し、さる篤志の方の御寄附がありました、その御厚意によつて、七十部ほど買いとることができました。そこで、これを故博士の学問に關係のふかいみなさまへ、一千円ずつでおわかちいたして、その全額を、母堂を通じて御靈前にさしあげたいと存じます。

ついでには、わたくしどもの、この小さき企てに御賛同くださつて、なにとぞ、一部ずつおもとめくださいますようお願い、はなはだ勝手でございますが、よろしくお願い申し上げます。

時節柄、御自愛くださいますように

昭和三十年七月十二日

敬具

渋谷区若木町九

国学院大学 金田一研究室

金田一 京助^①

〇〇〇〇様

「昭和九年ごろ」、「ものされた」という点はともかくも、言語誌叢刊第三期の一つに予定されていたという情報は、三十年後の今日としては、これを尊重せねばならない。言語誌叢刊の第三期分は、昭和十一年九月に四点が刊行されている。ただし、「昭和九年ごろ」、「ものされた」ということをもとにして、昭和七年三月の第二期分ではなく、第三期分に相当するのではないかと推測されたのであるならば、有用な情報とはいえなくなる。

『國語音韻史の研究^{増補}』(三省堂、昭和三十二年十月)の刊行を待たずに、昭和三十二年二月十日、母堂はこの世を去つた。自分が必死に支えたものが『上代音韻攷』であり、それが公刊されたとき、二人三脚はすでに終つたかのように。

〔注〕

(1) 本稿のみの読者に対して配慮するようにとの編集者の注文があったので、いささか前稿と重複する点がある。かつ、改めて記しなおすとしても、前稿がある以上、おのずと限度が

ある。この二点について、あらかじめご了承いただきたい。
 (2) ハガキは同封されたまま残っている。愛彦氏は、追悼会の
 もようを電話で報告した。

(3) 今日、『河野六郎著作集2』(平凡社、昭和五十四年十一
 月)に「有坂博士と所謂『重紐』論」として収められている
 (pp.二二二—二二八)。

この論文は、つぎのようにのべる。

要之、有坂博士は上代國語の母音對立の音聲的條件を考へ
 るため、その對立を表示する漢字の音の研究に向ひ、中古
 中國語音の微妙な差違を發見し、その差違を朝鮮字音・越
 南字音の特色に巧みに把へて、遂にその解決に到達された
 のであつて、その研究は中國語音韻史の奥深くまで及び、
 又日本・朝鮮・越南といふ舊中國語文化圏に廣く亘るもの
 である。博士の先見の明は能く中國及び外國の鏗々たる諸
 學者に先んじて問題の所在及び本質を突かれてゐた。(p.二
 三八)

大学卒業の直後、昭和六年五月に書きあげた「國語にあらは
 れる一種の母音交替について」(『音聲の研究』第IV輯に掲
 載、昭和六年十二月)において、すでに万葉仮名の甲類、乙
 類の區別につき、『韻鏡』上の位置や現代中國諸方言におけ
 るあらわれを問題としている。この論文は、卒業論文「奈良
 時代に於ける國語の音声組織について」(『上代音韻攷』所収
 の「有坂秀世博士略年譜」による。)の主要部分を書き改め

たものと思われ、少なくとも大学三年のときには、漢字音の
 研究に立ち向かつていたといつてよからう。

中國語学史上における最大の貢献は、いわゆる重紐問題で
 ある。ただ、有坂氏の用語では「拗音説」である。有坂氏の
 拗音説は、まず「萬葉假名雜考」(『國語研究』第三卷第七
 号、昭和十年七月、仙台。)によつて知られた。ところが、
 この拗音説は、すでに『上代音韻攷』(執筆の年代について
 は、注(15)を参照。)で展開されていた。その後、「漢字の朝
 鮮音について(下)」(『方言』第六卷第五号、昭和十一年五
 月)でもとりあげ、ついで、「カールグレン氏の拗音説を評
 す(一)」(『音聲學協會會報』第49号、昭和十二年十一月)、「カ
 ールグレン氏の拗音説を評す(二)」(『音聲學協會會報』第51
 号、昭和十三年三月)、「カールグレン氏の拗音説を評す(三)」
 (『音聲學協會會報』第53号、昭和十三年七月)、「カールグレ
 ン氏の拗音説を評す(四)」(『音聲學協會會報』第58号、昭和十
 四年七月)の四論文において専論された。

「有坂博士と所謂『重紐』論」が主としてとりあげるの
 も、当然、「カールグレン氏の拗音説を評す」である。しか
 しながら、

有坂博士の論文「カールグレン氏の拗音説を評す」は昭和
 十二(一九三七)年十一月以來十三年七月にかけて音聲學
 協會會報に三回に亘つて連載されたものである。(p.二三
 七)

とあって、問題とされているのは、「カールグレン氏の拗音説を評す(一)」から「同(三)」までのようにみえる。もちろん、このことは、そのすぐ後にづく部分

(それに関し)「それに引き續き私は一九三九年に、主として朝鮮字音と切韻・玉篇の反切の關係を考へ、切韻・玉篇の反切に甲・乙二系列が認められる點などを指摘して蛇足を加へた。」

(p.137)

と関連する。河野氏が「朝鮮漢字音の一特質」『言語研究』第三号pp.二七—五三掲載、昭和十四年九月)を書いて有坂氏の研究を發展させたときには、まだ『音聲學協會會報』第58号は刊行されていなかったであろう。

しかし、追悼講演会の席たる昭和二十七年六月十五日の時点では、「カールグレン氏の拗音説を評す(四)」も同時に論ぜられるべきであった、と私は考えるのである。なぜなら、有坂氏の拗音説は、この「カールグレン氏の拗音説を評す(四)」で確立したからである。この論文で、有坂氏は、 γ 型韻(四等專屬韻)が i 介音をもたぬ音だったのでないかという説を提出した。「カールグレン氏の拗音説を評す(一)」では、

……カールグレン氏が、 α 、 β の拗音的要素 i に對し、 γ の拗音的要素を i と推定したことは、甚だ有意義なことである。 α 、 β の consonantique に對する γ の vocalique といふ、この結論に對しては、私は特に反對すべき理由を持たない。(p.12)

とのべているのである。(aとは三四等兩屬韻、 β とは三等專屬韻をいう。)これは γ 型韻直音説とはあい、いれない。一年半ほどの間に、有坂氏の拗音説は發展したのである。従つて、これらの論文が『國語音韻史の研究』(明世堂、昭和十九年七月)に収録されたときには、論旨が一貫するように書き改められた。「 γ の拗音的要素を i と推定したことは、巧妙と言ふべきであらう。」とされ、「 α 、 β の consonantique に對する γ の vocalique といふ、この結論に對しては、私は特に反對すべき理由を持たない。」の箇所は削除されている。また、「カールグレン氏の拗音説を評す(四)」では、今日「類相関」と呼ばれる問題についても修正があり、さらに『國語音韻史の研究』において、有坂氏としての最終的見解が示されているのである。かくのごとく、「カールグレン氏の拗音説を評す(四)」(と『國語音韻史の研究』所収の「カールグレン氏の拗音説を評す(一)~(四)」)とは、有坂氏の拗音説にとって重要な意味をもつのである。なお、このことについては、拙稿「前史—石塚龍磨から有坂秀世まで—」(『中國語學』第二二八号、昭和五十六年十一月)を参照されたい。

「有坂博士と所謂『重紐』論」にみえる重紐關係以外の有坂氏の論文に「隋代の支那方言」(『方言』第六卷第一号、昭和十一年一月)と「山東系の一方音について」(『方言』第七卷第一号、昭和十二年一月)がある。前者は『切韻』の性格について論じたもので、陳寅恪「東晉南朝之吳語」(『歷史語

『言研究所集刊』第七本第一分、一九三六年十二月）および陳寅恪「從史實論切韻」（『嶺南學報』第九卷第二期、一九四九年六月）とともに、『切韻』は主として洛陽音にもとづいたものであるという見解の代表とされる。有坂、陳兩氏の考えは、必ずしも全同ではないと私は考えるが、そのことはともかくとして、同じ一九三六年内に発表されたものではあるけれども、有坂論文の方がほぼ一年早いことを高く評価すべきである。

後者「山東系の一方音について」は、国語音韻史を論ずるための中国語音韻史研究という枠をすでに超えている、と私は拙稿「学士院賞」で論じた。この論文については、なお問題とすべき点があると感ずるので、稿を改めて論じたい。

以上のほかにも、中国語学にとって有用な論文がいくつもあるが、ここでは「有坂博士と所謂『重紐』論」にみえる範圍に限定する。

(4) 『音聲學協會會報』は第74、75号（昭和十八年十二月）までで、第76号（昭和二十五年五月）より『音聲研究』、第77号（昭和二十六年八月）より『音聲學會會報』と改称された。

(5) 拙稿「学士院賞」〔本書五六頁〕 p.四五。

(6) 追悼講演会の内容を『言語研究』の「彙報」によったのは、有坂氏が逝去時まで会員であると記されていることによる。講演会の名称は、言語学会が「故有坂博士追悼講演會」、国語学会が「公開講演會〔東京〕第二十五回—故有坂秀世博

士追悼—」、音声学会が「有坂秀世博士追悼講演會」というぐあいに不一致である。この点も、やはり、言語学会に従うことにした。ただし、標題その他の個所で「故」の字は省いた。

(7) 昭和二十七年二月十二日、学士院賞授賞決定、正式発表。同年五月十二日、学士院賞授賞式。

「三月」は、この年の学士院賞にとって何の関係もない。拙稿「学士院賞」参照。

(8) 徳川宗賢氏の昭和五十九年七月二十七日付ハガキで、つぎのような教示を得た。

前略 有坂氏と国語学会ですが、第4集所載の仮名簿には有坂氏の名がのっていること御存じの通りです。ところが学会事務室の保存用の『国語学』では有坂氏のところは赤で消してあります。（ナオ同123へをみると、青柳潔氏も赤で消してあります。別に麻生磯次・安藤重雄氏が氏名住所補入、青柳斐足立鉄次氏のところ住所変更がいずれも赤で記入されています。そしてそのすべては第五集146へに記されています。）従って文字通りには二五・七・八以降同一二・一一以前に赤印が引かれたこととなります。しかし第五集146へには有坂氏についてだけ何も記されていません。これは何を意味するか——。ともあれ御一報まで。

これによれば、第四輯と第五輯の間に有坂氏が国語学会を退会した可能性もある、ということになる。

(9) 昭和二十七年六月十二日付の金田一京助氏にあてた母堂の書簡には、

.....なほ来る十五日には秀世のため追悼講演會を御催し下さいますよし、愛彦も是非参上いたし度申居りました處 大した事にてはございませんが昨日順天堂へ入院いたしましたので参上いたしかね、愛彦の兄光威も勤務先の都合にて當日は残念ながら参上いたしかねまして 私のみ光威の娘一人をつれまして参上いたし拝聽させていたよきます.....

とある。

(10) 拙稿「有坂秀世研究のために―療養生活その他―」(以下、拙稿「療養生活」と簡稱。東京都立大学人文學報第一六六号、昭和五十九年三月。)参照。

(11) 募金活動の趣意書を以下に掲げる。本来は、拙稿「療養生活」でとりあげるべきであったが、その後に見えられたので、ここに補う。

拝啓、暑さを増して参りましたが益々御健勝の御事と存じます。

扱て、既に御存知の事とは存じますが、私共の畏敬する言語學者 有坂 秀世 博士は長年御病臥の処、最近御病勢がすまされ、承る所によると最近治療費その他の出費の爲、御愛藏の書籍すら手離されました由、まことに御氣の毒に存じます。たま／＼その御様子を仄聞致しました在京

の同學の者が思い立ちまして御見舞申し上げたく存じ、甚だ勝手乍ら発起人となり左記の要項を定めました。何卒御協力の程を御願ひ申し上げます。 敬具

昭和廿六年七月五日

記

一、金額・一口百圓、一口以上、

一、期限・昭和廿六年八月五日迄、

一、送金先・東京都本郷局区内、東京大學文学部言語學研究室 宛

発起人

金田一 京助 宛

(振替御利用の方は同封の用紙に「有坂博士見舞金何口」と御明記の上、東京九九六八三番 日本言語學會へ御拂込下さい。)

以上

代表者 金田一京助

池上 二良 池田 徳眞 今泉 忠義

岩淵悦太郎 大島 功 大野 晉

金田一春彦 高津 春繁 河野 六郎

柴田 武 竹田 復 辻 直四郎

東條 操 時枝 誠記 徳永 康元

永島栄一郎 西尾 光雄 服部 四郎

林 大 峯村 三郎 三根谷 徹

山本 謙吾 頼 惟勤 (五十音順)

追伸

一、最近の御病状から一日も早く御見舞申し上げた方がよろしいと存ぜられますので、御送金はなるべく早く御願ひ申し上げます。

二、直接発起人に御託し下さつても結構でございます。

(12) このとき寄託された書籍は、現在、東京学芸大学鈴木研究室に保管され、鈴木眞喜男氏によって「有坂秀世博士旧蔵書仮目録」(昭和五十一年一月)が作られている。

『上代音韻攷』の原稿も鈴木氏によって保管されているが、ノートについては、私はまだその所在を確認していない。そのうち、『語勢沿革研究』だけは公刊され、内容は知られている。

(13) 東京都文京区白山五―三六―五(現在の住居表示)にある浄土宗浄雲院心光寺の住職、清水龍道師。

(14) 故永島榮一郎氏蔵。

(15) 河野六郎「故有坂秀世博士遺稿『上代音韻攷』」(『国語研究』第五号、国学院大学国語研究会、昭和三十一年十月。)によれば、「(諸種の徴証から本書の原稿は昭和七・八年頃に書かれたものらしい。)(p.五八)とされる。なお、この原稿の執筆年代にふれたものには、このほか、森博達「重紐をめぐる二、三の問題―中国語学会第30回大会音韻関係シンポジウムを聞いて―」(『中国語学』第二二八号、昭和五十六年十一月)、拙稿「療養生活」がある。

(昭六〇、一、二二、改稿)

〔附記〕

四兄有坂愛彦先生、同夫人富子氏、上智大学教授金田一春彦先生、東京学芸大学教授鈴木眞喜男先生、東京都立大学教授大島一郎先生、大阪大学教授徳川宗賢先生には種々有益なご教示を賜わった。ここに衷心よりお礼を申しあげる。

ことに金田一先生には、このたびも「有坂敏子書簡集」その他の貴重な資料を使わせていただき、全面的なご支援を得た。このことがなければ、有坂秀世研究のための基礎作業の一環たるこのしごとは、一步も進まなかつたと思われる。

なお、秀世博士の書簡集は、将来、公刊される可能性があるが、母堂のそれについては可能性がないと思われること、また一方、金田一京助博士の愛弟子に寄せたなみなみならぬ愛情の一端を知ることができること、この二つの理由によって、つとめて母堂の書簡を引用し、資料として提供するよう心がけた。